

<趣旨説明>

セッション「ハイエク思想の深層」 Into deep layers of F. A. Hayek's thought

セッション代表者：太子堂 正称

20世紀を代表する経済学者の一人であるF.A.ハイエクの思想については、主に80年代からの様々な領域における研究の進展、また春秋社による第二期翻訳全集の完成などの結果、一般社会も含めて一定の受容が進み関心が高まっているのは確かであるが、しかし、その理解は未だ、新自由主義（ネオリベラリズム）のイデオログ、あるいは自由放任（レッセ＝フェール）の主唱者といったステレオタイプなものを脱却しきれていないと思われる。一方、彼の業績が経済理論や自由論に留まらず、法学、政治学、思想史、心理学、認知科学、進化論といった幅広い分野にまたがること自体は比較的知られているものの、しかし、そうした彼の思想の多面性に光を当て、内在的な関連を検討する作業はまだ端を発したばかりと言ってよい。もちろん彼にとってそうした作業の数々は、独自の自由論を体系化し説得的なものにするための内在的理由に基づいていたが、同時に、彼の自由論に賛成するか否かとは別に、その議論はより幅広い関心を引き寄せ、様々な文脈において位置づけられ解釈される余地を大きく残している。

そうした問題関心に基づき、本セッションでは、ハイエク研究において議論の蓄積が未だ少ない領域である、彼の社会科学方法論、心理学と進化論、そして共和主義思想との関係について焦点を当てる。

第一報告（原谷直樹）「ハイエクの社会科学方法論」は、従来、ハイエク思想における大いなる矛盾あるいは迷宮と解釈されてきた彼の方法論における転換問題（方法論的個人主義と全体論との相克）を、一貫した流れの中で整合的に解釈しようとする野心的な試みであり、同時に、社会科学そのものの定義についても新たな視座を提供する。第二報告（吉野裕介）「ハイエクの心理学と進化論」は、従来、検討の必要性が深く認識されつつも解明が進んでこなかった、ハイエクの心理学と進化論の関係について分析を行う点でたいへん意義深い。それは彼の自由論の根源であると同時に、現代の心の哲学や認知科学との関係を視野に収めつつ、「人間と社会に関するグランドセオリー」の基盤としても位置付けられる。第三報告（太子堂正称）「ハイエク思想における共和主義的契機」は、そうした文化的進化、特にルールの進化における人間の理性や設計の意義について、ハイエクがそれらを全面的に否定するのではなく、入念な配慮のもとに、極めて限定された形ながらも一定の役割を与えていたことを明らかにする。それは共和主義的な立法機構論に基づいており、自由主義と民主主義の相克という古来の、かつ現代的な課題にも示唆を与えるだろう。

また、政治思想や法哲学の分野から討論者（渡辺幹雄氏、鳥澤円氏）をお招きすることにより、上記の問題に不可欠な学際的な議論を展開する一方で、フロアともども経済思想の持つ多様な可能性を示す一助となることも期待している。

